

「山崎八幡神社と池田恒元」



▲山崎八幡神社

篠ノ丸城跡の南麓、山崎町門前の山崎八幡神社は、大同二年（八〇七）に鎮座したと伝えられる古社です。

近年、鳥取県倉吉市の小

鴨神社が所蔵する「三十六歌仙額」（同市有形文化財）の裏書から、中世宍粟郡を支配した宇野氏一族が天文六年（一五三七）に「幡州完栗郡柏野庄八幡宮（※原文のまま）」、すなわち山崎八幡神社の前身にこれを奉納したことが確認され、戦国時代には地元有力者と密接な関係を築いていたことが明らかとなりました。しかし、天正八年（一五八〇）には羽柴秀吉による宇野氏攻めの兵火に遭い、一時衰退したといわれています。その後、八幡神社が明確に史料上に姿を見せるのは、池田家一族が宍粟の領主となる時代を待たなければなりません。

宇野氏の滅亡後、黒田官兵衛、木下勝俊など宍粟郡の領主は次々に交代し、慶長五年（一六〇〇）池田輝

政が播磨国一國の太守となつてようやく安定をみます。前号で紹介された池田輝澄は輝政の四男で、慶長二〇年（一六一五）に初代宍粟藩主に封じられました。

ところが、寛永十七年（一六四〇）輝澄は家中騒動の責任を問われ改易され、鳥取藩鹿野（鳥取県鳥取市）へお預けの身となります。かわつて和泉岸和田藩（大阪府岸和田市）から入封した松井（松平）康映は、善政を敷いたと伝わりますが、わずか十年ほどで石見国浜田藩（島根県浜田市）へ転封となりました。

そして慶安二年（一六四九）十月、池田恒元が備前児島藩（岡山県）二万石から加増移封され、宍粟郡のうち三万石を領有することになります。恒元は池田輝政の孫で、輝澄の甥にあたり、兄には「名君」として名高い岡山藩主池田光政がいます。本年三月に市有形文化財に指定された「地詰帳」（「山崎町方文書」）からは、恒元時代に城下の町並み整備が更に進んだことが明らかになりつつあり、恒元が領地経営に優れた手腕を発揮したことが窺えます。

また、神道に強く傾倒していた兄光政の影響から、領内の神社政策に熱心に取り組んでおり、一宮伊和神社にも社領（土地）を寄付するなど、保護を加えていました。中でも、城下の総鎮守社ともいうべき山崎八幡神社に対しては格別の崇敬を寄せていたようで、寛文六年（一六六六）に

は社領、寛文八年（一六六八）には京大坂の職人に特注した楽器・弓矢（池田恒元寄進楽器）市有形文化財）を奉納しています。これらは現在も社宝として大切に保存され、質素でありながら華美を尽くした江戸前期の工芸品の姿を今日に伝えています。

特筆すべき点として、同時に残された寄進状（「山崎八幡神社文書」市有形文化財）から楽器類がほとんど欠損することなく残り、制作者や材質等までも明らかにできることが挙げられ、全国的にみても希有な事例といえます。また、わずか三万石の小藩の領主がこれほどの工芸品を制作し、特定の神社に手厚く保護を加えた点も注目し値します。

宍粟藩三代藩主池田恒元は、現在にも続く山崎の町並み整備や八幡神社の再建に尽力し、その信仰に基づく江戸時代の地域文化を現代に伝える上でも極めて大きな役割を果たしています。江戸時代の宍粟の歴史を語るうえで、欠くことの出来ない人物であるといえるでしょう。

（宍粟市歴史資料館）



※「池田恒元寄進楽器・弓矢附納箱」は山崎歴史郷土館（宍粟市立図書館二階）にて見学可能です。見学は図書館窓口にてお申し込みください。

編集後記

「今日の天気は夜まで曇り。夕方までは大丈夫！」と、自転車で通勤すると、お昼頃からまさかの大雨に遭うことも。この時期、なんとなく天気予報の的中率が下がっている気がします。

7月中旬から8月にかけては、宍粟市のあちこちで夏祭りが行われます。地域の盆踊りなども含めると、市内でいったいどのくらいのお祭りが行われているのでしょうか。その数だけ天気の心配をされている人がたくさんいるということですね。私は今年も地域のお祭りに出かける予定です。当日はいい天気になりますように。

石

広報しろう 7月号

平成27年7月15日発行(124号)

発行／宍粟市 編集／企画総務部秘書広報課 〒671-2593 兵庫県宍粟市山崎町中広瀬 133-6

☎0790-63-3000(代) FAX 0790-63-3061(代) ✉info@city.shiso.lg.jp 🌐http://www.city.shiso.lg.jp



この広報紙は環境保護のため、植物油インキと古紙再生紙を使用しています。

Public Relations SHISO [2015.7]